



戦争の記憶と国家

帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン

黒田賢治 著

1980年代に、8年に及んで続いたイラン・イラク戦争。

戦後、ある帰還兵は、

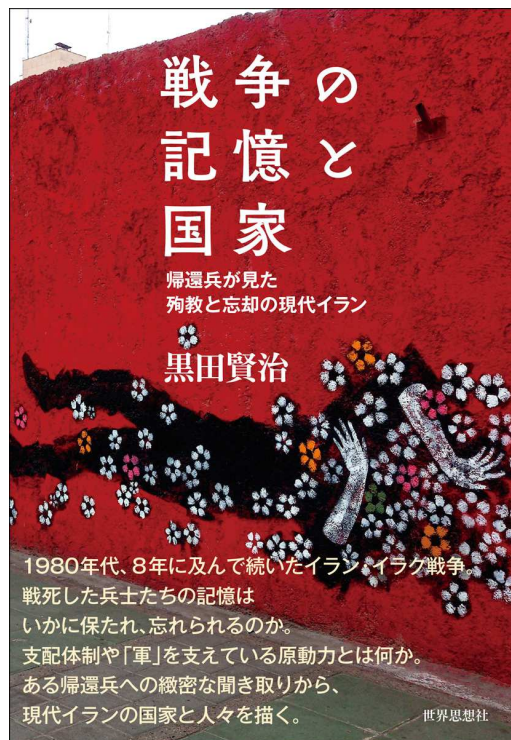
「戦争は終わった、だが、闘いは続いている。これも闘いなのだよ。今日、君とこうやって〔墓地を〕訪れ、時を過ごしたことも、闘いなのだよ。」

と語った。

戦死した兵士たちの記憶はいかに保たれ、忘れられるのか。

支配体制や「軍」を支えている原動力とは何か。

緻密な聞き取りから、現代イランの国家と人々を描く。



◎本書の内容◎

第1章 中東の大国イランにおける「軍」

- 一、中東の大国イランの誕生
- 二、イラン・イスラーム共和体制の軌跡
- 三、支配体制を存続させてきたメカニズム
- 四、本書の調査概要

第2章 勝者のいない戦争

- 一、揺れ動く攻勢——防衛戦から勝者のいない戦いへ
- 二、イラン・イラク戦争と戦没者たち
- 三、語られる戦争と埋め合わせられない記憶

第3章 死の社会的転換装置としての「殉教」

- 一、言説的伝統としての「殉教」
- 二、イスラーム共和制史観と「殉教者」認定
- 三、「聖域防衛の殉教者」
- 四、埋められない記憶に直面する二つの殉教者家族
- 五、「賢者の石」の限界

第4章 忘却と記憶の政治

- 一、記憶と忘却と殉教者博物館
- 二、殉教者博物館という地域コミュニティ空間
- 三、「殉教者」の記憶化——記憶をひろい集める
- 四、記憶と忘却の政治

第5章 消費される「殉教文化」

- 一、文化的コンテンツとしての「殉教」と消費者の多層性
- 二、「殉教文化」とポピュラー音楽の「大衆化」
- 三、娯楽を埋め込む戦争博物館

第6章 情動の政治と修復する未来

- 一、二つの抗議運動にのめりこむ
- 二、情動の政治と日常の恐れ
- 三、ブラスコー・ビルディングの火災の悲劇とロハスの目覚め

黒田賢治(くろだ けんじ)

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点・特任助教／人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・研究員。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了。専門は、中東地域研究。近年の著編著に共編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版、2018年、共著『「サトコとナダ」から考えるイスラーム入門—ムスリムの生活・文化・歴史』星海社、2018年、『イランにおける宗教と国家—現代シーア派の実相』ナカニシヤ出版、2015年などがある。

『戦争の記憶と国家—帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』 黒田賢治 著
定価3,520円(10%税込) 2021年10月刊行 四六判・上製/254頁 ISBN978-4-7907-1760-7

ご注文冊数

冊

お名前

お電話番号

書店印

ご住所〒



世界思想社

〒606-0031 京都市左京区岩倉南桑原町56

電話：075-721-6500 FAX：075-721-8707